

〈ミニ講演〉

「個」に寄り添う教育

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

こんばんは。教職課程センター長の尾木直樹です。

今、谷崎先生のお話を聞いていて、本当に大事なことを家族との関係のなかでつかんでこられて、しかもそれをラグビーという非常に激しいスポーツのなかで実践されていて、大変勉強になりました。

最初に YouTube の「教科書にのせたい！」が流れましたが、あれで僕は谷崎先生を間接的に知ったんですね。「すごい人がある」と思って、本当に取材に行きたいなと思ったぐらいなの。そうしたら、今日会っちゃった。テレビで見たよりも数倍いい先生で、びっくりした（笑）。「教科書にのせたい！」は TBS の番組だったんですけども、非常にいい番組だったんですね。僕もレギュラーで出たんですけども、齋藤孝先生も一緒に出ておられたんです。齋藤先生は明治大学の教職課程の担当をされていて、僕と同じような立場なんです。

先ほどの YouTube では、僕がコメントしたあとで齋藤先生のコメントが流れて、途中で切れて終わっていましたが、あのなかで「自主性に任せるといのは、そのほうが困難なんです。難しいことなんです」とチラッとおっしゃっているの。あれはキーワードです。自主性に任せるといこと、許していく、任せていくといことほど、本当に大変なことではないんです。

これは乳幼児期からの問題でいえば、一つ一つを自己決定させていく、自分で決定させるということです。日本の場合、ここが最も苦手なんです。家庭教育のときからすぐに親

がこうする、ああする、きょうはちょっと寒いから、この靴下のほうがいいのか、全部決めていく。二つ提示してみて、「じゃあ、僕はこっちにする」とか、自分で決めさせていくことがものすごく重要なのに、それをずっとやらないで、家庭で育ててきています。

それから乳幼児の保育園、幼稚園の教育機関なんかまでも、そういつて、それを守らせる大人が何でも決めるスタイルを取ってしまっている。そこに小学校、中学校、高校、大学と同じスタイルで続けているわけですから、「俺についてこい」方式というのはすごく浸透しやすいんです。

だから、そもそも監督に責任があるとか、監督の指導力だとかそういう問題だけではなくて、日本のスポーツ文化のところで次々と貧弱な問題が発覚して、皆さん覚えておられるように、「全柔連」なんか大変だったでしょう。

だって、柔道で命を落とす子が、ここ 28 年を振り返っても、平均で年に 4 人も亡くなっているんですもの。こういう国家はないですよ。例えばフランスなんか、あれだけ柔道がさかんな国です。日本以上に柔道人口が多いんです。それなのに 2005 年以降 1 人も死者が出ていない。わが国で年間 4 人も亡くなっているということは、全身麻痺や大変な障害を負っている子は、たくさんいるんです。こちらへん、指導の仕方とか何かが緩いんじゃないかと思われるかも分かりませんが、先ほどから谷崎先生が、ニュージーランドではこうだったので衝撃を受けたとおっしゃっています。グローバルな視点で日本のスポーツ文

化や、あるいは教育の問題ももちろんそうですが、捉えていかないと、何が正しくて何が間違いか分からないですよ。みんなどの先生も一生懸命なんです。間違っただけでも一生懸命になるのが怖いわね。また、それをありがたがる親がいるわけです。

国際的、地球規模で見たときに、野蛮な国家ですよ。これだけネットが発達していても検索できるのに、誰も気づかずに生きているというのは国際社会でもこの日本くらいじゃないかしら。本当に怪奇の国。

柔道の話ですが、フランスではなぜ死者が出ないのかという問題です。柔道のことにあまり深入りしたくないのですが、例えば全柔連の組織はずいぶん変えられました。しかし、講道館がすごい実権を持っておられてますよね。例えばオリンピックで金メダルを取った柔ちゃんなんていったら、もう最高の指導者みたいに思いませんか。日本では、実績を挙げた方が優れた指導者と、イコールになっているんですよ。

だけど、例えば昔、東京オリンピックで金メダルを取った人でヘーシンクという方がオランダにいました。ヘーシンクといたら柔道で金メダルを取った人だというのが分かる人、どれくらいいますか。ありがとうございます。多いわね。

僕は柔道は日本のお家芸だと思っていましたから、金メダルは全部取ると思い込んでいたんですよ。そうしたらヘーシンクに負けたんです。あの人が金メダルを取って、すごい違和感だったの。なぜ外国人なのに柔道で金メダルを取っちゃうのかと思ったのですが、例えばその金メダリストのヘーシンクであっても、中学生、高校生を教えることはできません。

なぜか分かりますか、そこにはきちんとライセンス制度というものがあるんです。子どもへの指導というのは、自分は選手として金

メダルを取った、1位だったということとは関係なく、それは技術ができるということであって、例えば急に意識不明になったとか、脳震盪を起こしたときに、どのように救命するのかとか、いろいろなことを全部講義や実習を受けてライセンスを取らない限り、教えることはできません。

だから、日本でいえば、柔ちゃんはオリンピックで金メダルを2回取ったんでしたっけ。「ママでも金」という有名な言葉がありますよね。あの柔ちゃんは、海外に行けば教えることはできないんですよ。日本だったら、もう大歓迎ですよ。このように教えるということの意味、そこには独自の体系と責任があるんだということが分かっていない。そして子どもの安全と安心は、絶対的に確保しなければいけないテーマなんだと。

教師も法律で縛られていたり、例えば体罰はふるってはいけないと学校教育法の第11条のただし書きに明確に書かれていますが、そういう法律論ではなくて、もっと重要なのは子どもの安心、安全の確保なんです。法的にいえば安全配慮義務があるのかなのかという問題は、いじめの問題のときなんかでも争点になるくらい重要です。

ところが、次に県大会で優勝するんだというのが出てくると、そんなことは吹き飛ばしてしまう。親のほうも子どもの安全を吹き飛ばして、先生を全面的に応援してしまう。これって、一体なんだろう。僕は相当に野蛮だと思えます。

そんなことで、齋藤孝先生が、自主性に任せるとするのは本当に厳しいことなんだと。君たち、俺についてこいではなくて、君たちで考えなさいというチームに委ねる方法。あるいは、あなたたちひとりひとりが自分でチェックし点検し、自分で到達すべき目標を決めて、その達成のために練習メニューを決めて頑張ってみなさいと言われてたら、これは大変なこと。相手チームの研究にしても、チー

ムに任されてやってみようとなれば、もちろん監督や指導者の見ている分析も重要ですが、子どもたちはまた違う見方をしたりするものです。

そもそも教職とか教師をめざそうという関係者の方、あるいはそれに興味をもった方がきょうはたくさん来てくださっていると思うんですよ。もう少し幅広く、いろいろな関心があるのではないかと思います。

そもそもこのシンポジウムは教職課程センターが主催していますが、では僕自身、なぜ教師になったのかと、皆さん思わないですか？

この前の日曜日に、35年前に卒業させた中学生の同窓会をやったんです。107人も集まったの。みんな50歳にもなるのに。不思議ですね。集まってきた子、成績トップで東大に入ったとか、京大に現役で入ったという子は誰も来ない。来たのは、「先生、迷惑かけました」というような子ばかり。「ちゃんと生きてたんだね」などと握手してね（笑）。

人間が成長していく過程というのは、本当に長いスパンで変わっていくものだし、中学校のときは中学校のとき、高校のときは高校のとき、教師がきちんと愛情をかけて接していけば、それがどこかで実っていたり、どこかで思い出されて形になっていくんだと思いました。だから高校3年間、大学の4年間だけで勝負を全部かけるみたいなことは、あり得ない。将来へとつながっていく、どこかで花開いていくというか、そういう見通しをもって教師は子どもたちに接しないとイケないと思いました。

そもそも僕が教師になったのはどうしてか。教師にだけは絶対ならないと決めていた。

中学校の3年のときに体育の先生に、僕は間違えて殴られたんですよ。うちのおやじは、僕のことを殴ったことがなかったんです。97歳で亡くなりました。一度も僕の胸ぐらもつ

かんだことがない。明治生まれの人ですよ。怒鳴ったこともないんです。

なぜかという、自分が自分のおやじから殴られ続けて育ったというんです。その自分のおやじというのは、何と学校の先生だったんですよ。それでそのとき父ちゃんは、「殴らなくても分かるのに」といつも思っていた、何で親は殴るんだろうと思いつけていた。だから、自分が親になったときには絶対に子どもを殴らないと決めていたというんです。

そして僕たち兄弟3人いたんですが、いつも子どもの前で、「父ちゃんは絶対にたたかないからね。だから、話すから、言葉で分かってくれよ」と、何百回言われたか分かりません。耳にたこができるほど。そして見事に死ぬまで一生、1回も子どもを殴ったことはありませんでした。

それで中学3年のときに、体育の先生が間違えて、勘違いして僕のことを殴ってしまったとき、帰って、「父ちゃん、たたかれた」と僕は報告したわけです。そうしたら父ちゃんが激怒して、すぐ教育長に電話して、「うちの子がこんなふうにやられた。とんでもないじゃないか」と抗議をしたわけです。

あくる日、僕は職員室に呼ばれて、「そうだったのか。先生は勘違いしたみたいだ。申し訳なかった」と率直に詫言ってくれました。これはこれで、先生というのは教育長に弱いなと学びました（笑）。

そして今度は高校に行ったら、また体育の先生が体罰教師だったんです。ごめんなさい、体育関係の教師になろうと思う人が多いのに、こういう少年もいたと思ってください。僕は運動神経、いいんですよ。すばしっこいの。走るのはだいたい1番なんですよ。

俊敏性もあったから、いろいろな模範演技なんか、体育の先生にかわいがられて、「おい、やってみろ」と、マット運動などやっていたんですよ。僕はできるから模範演技をやる役割だったんですが、クラスのほかの友達がで

きないと、その先生はその子のお尻を蹴るんですよ。蹴りを入れて、指導していくんです。「おまえ、何をやってるんだ」とパーンと蹴るんです。

6月の下旬くらいだったかな、僕はそれに耐えられなくなっていたんです。僕はいい役をやっているわけですよ。褒められて、いつも先生にかわいがられて模範演技をやって、「尾木みたいにやってみろ」と言われて。でもできないと友達に蹴られるんですよ。僕は努力していないのに、できるだけなんです。

それがたまらなくなつて、僕は思わず、K君が蹴られたときに発作的に「先生、やめてください」と言ってしまったんです。彼は一生懸命やっているのに、毎回蹴られるんですね。それで言ったら、先生はびっくりしたわけね。「先生、それは憲法違反です」って。間違つて言ったの。本当は学校教育法違反だった(笑)。「先生、憲法違反です。やめてください」と言ったら、先生のほうが怒っちゃつて、かわいがっている尾木が俺にはむかつてきたというので、「おまえ、憲法違反でいやだというのだったら、授業なんか出るな」と言つたんです。「じゃあ、分かりました。僕、次から授業に出ません」と言つて、授業をボイコットして出なかつたんです。

そしたら成績、その高校は30点が合格点だったのに、29点、赤点でつけてきたんですよ。なかなかですよ。単位、くれなかつたの。

その先生のことを僕はそんなに悪い先生だと思つていません。たぶんそれをつけて、春休みにでも補習とか、なんかちょっとやらせて、「おまえの言うのも分かるけれども、みんなの前で言うものではないよ。授業をボイコットするのもおかしいだろう。何でもうちょっと早くに先生のところに接触しに来ないのか」とかいろいろなことを言つて、合格点の30点に切り替えようと、たぶんされていたと思うんです。今、教師になつてみて、僕は「教育的配慮」だったんだろうなと思

ているの。

ところが、運が悪いこととかいうか、人生というのは不思議です。滋賀県の学校だったのですが、その年にうちのおやじが四国の香川県高松市に転勤になつたんです。学校を転校しなければいけなくなつたんです。転校のためには、前の在籍証明や成績証明を持って編入試験やいろいろな窓口に行かなければいけない。それで行つたんですね。

そうしたら、ある学校は編入試験を受けさせてくれて、「どうぞ2年生から来てください」と大歓迎だったんです。ところが、ある学校は面白かつたんです。編入試験の合格発表を見に行ったら、僕の受験番号が書いてあつて、「この者は校長室に来るように」と書いてあるんです。おかしいな、カンニングした記憶もないし、悪いことはしていないのに何で校長室に呼ばれたのかなと思つて、母親と2人で行つたんです。

そうしたら、「君は高校1年生を修了していません。編入の資格はありません」と言われた。そういえば体育が29点ですから、1年生の課程が終わっていないんですよ。それで「もう一度1年生からやり直すというのだつたら、どうぞ」と言うんです。この校長は腹がすわっている、筋が通つていると思つて、もう1つの「来てくれ」という県立高校を断つて、もう一回やり直すことにしたんです。だから、僕は高校1年生を2回やっているんです。

そうしたら、やり直す这么简单に言つたのはいいけれども、けっこう厳しいんです。1回分かつていることをもう1回やることの苦痛。数学は同じ教科書だったんです。もういやになつちやつた。それで暗い気持ちになつて、高校時代は引きこもりの精神生活になつて、学校が終わつたらすぐに、県立図書館がすぐ近くにあつたものですから、そこに行つて、夕方の6時20分くらいから「ひよっこりひよたん島」を見ながら、香川県のおいしい

うどんを食べ、夜の9時の閉館までずっと図書館で本ばかり読んでいたんです。その高校は受験のことにうるさい学校だったんです。どこどこの大学、どれだけの偏差値とかなんだかんだと言われて、むかついてしまって、偏差値に頼らないで、まっとうな勉強をして大学に行こうと、無理したのよ(笑)。だけど、受験技術がないと受からないんですね。

そんなことがあって、だから僕は一貫して体罰でつまづいているんです。そして教師になって、46歳のときに僕は辞めることになるのですが、その辞めるきっかけは何だったかという、僕が持っていた中学1年生のクラスの生徒が、ある朝、月曜日ですが、学校に行ったら3、4人丸刈りになっているんです。「えっ、どうしたの」と聞いたら、きのうの日曜日、練習試合で小学生とやっけて勝てなかったというんです。恥を知れというので、「今日中に丸刈りにせい」と言われて、サッカー部の1年生は全員丸刈りなんです。

それは1995年くらいのことですが、94年に子どもの権利条約というのにわが国は批准していて、そんなことは絶対に許されない条約なんです。僕はNHKなんかに出て、子どもの権利条約、子どもの意見表明権とか、2週連続で特集番組にコメントしながら担当したりしていたんです。それで自分の学校に行ったら、体罰が横行しているわけです。僕のファンだという先生が職員室で僕の左に座っていて、平気で生徒に正座をさせていたこともありました。僕のファンなら、そんなことしないでしょと思うのに、ニコニコしながらしているわけ。それは転勤して行った先で1年目に起きたことです。メディアで言っていることと、自分の学校の実践が違う。僕は自己矛盾に陥ってしまって、教師を辞めたんです。

その前の練馬の学校にいるときには、本当に樂園みたいな学校をつくることができました。チャレンジということを先ほどから谷崎

先生は何回もおっしゃっています。発想の転換をして、新しいことに挑戦するというのはすごく勇気がいるんですが、挑戦ですから、失敗したら戻ればいい。

僕の個性を尊重する教育の実践というのは、中学校ではやりにくいんです。教科担当になっていて、学年体制に入っていきますから、学校、学年で決めたルールはみんなが守らなければいけないというので、教師も同じような指導を迫られる。例えば学生服のホックをきちんと締めるのを習慣にしましょうと、形で決まるわけです。そうすると、どの教室でも声をかけなければいけないとなってくる。これでは教師側も個性豊かなアプローチを子どもたちにすることができません。だから、先生のほうもひと固まりになってしまう。生徒に全部同じ形で迫って行って、集団をどうつくるか。アカデミックな意味での集団教育ではまったくなくて、一斉主義というのか、形を整えるというところに入っていくわけです。

練馬の中学校にいたとき、あるとき偶然にですが、教師の質が高い学年をつくることができました。学校には必ず問題の先生がいますから、足を引っ張る先生がいるんですよ。

そういう先生がいるときは、その先生のよさを生徒にアピールしながら、先生たちは結束しているよというのを見せる。これは勝負なのですが、僕は当時、学年主任をやっていましたので、そういうことにはすごく配慮していて、すごくレベルの高い学年の教師集団ができたし、取り組みも一生懸命8クラスにアプローチしてやっけていくことができました。

ところが、卒業式の段階で、やはり砂を噛んだような思いを残したまま見送らなければいけない生徒というのが2、3人いたんです。これだけ頑張っ、これだけ力量の優れた教師集団をもってしても、100%どの子どもも伸びたというようにはならない。これは教育実践

としてはアプローチの仕方が間違っていたのではないか。集団をつくり、その中で個を育てていくというのは、ひょっとしたら、これは逆じゃないか。

だから、3年生を送り出してから、大体また1年生に下りるわけですが、その段階で1人ひとりを大事にしよう。そういう意思統一を教師集団の中でしたんです。1人ひとりがちゃんと自立して、両足が大地に着いた状態で両隣の子どもたち、仲間と手を取り合う。つぶあん状態。「つぶあん」という言葉をよく使ったんです。あんぱんには「こしあん」と「つぶあん」があるでしょう。僕はつぶあんが好きなのよ。口に入れたとき、つぶつぶが口の中にあたるの。あれが個性を主張しているようで、愛おしくなる。こしあんもおいしいんですが、つぶれちゃってるでしょう。そうではなくて、つぶあん状態の子どもたち、これをつくっていくこと。

そして先ほど谷崎先生がおっしゃったように、失敗したら戻ればいい。われわれは力があるのだから、全体主義的な指導にはいつだって戻れる。だけど、せつかくのこのときに転換してみようというので、集団より個に寄り添うというスタイルに切り替えたんです。

そうしたら、僕たちが例えば10のことを願っているのに、体育祭をやると、子どもたちは15、20のことをやってのける。文化祭でもそうです。これは何なんだと、教師があとから子どもたちのその姿に学び、ついていくような状況になったんです。初めてです。だから、集団をつくっていくというのは、ひょっとしたら間違いかもしいないと思っています。個別教育です。個を尊重し、個を育てていくなかで、その個の子どもたち100人、300人が結束してくる。

そして、個の尊重というのは何なのかというと、自分で決定させるということです。1人ひとりに考えさせる。自分で決定したら、あるいは10人が相談して、ミーティングで

決定したら、それは自分の責任、自分たちの責任です。監督でも顧問の先生でも、あるいは担任のせいでもない。自分の責任です。

だから、うまくいったら、皆さんどうなると思いますか。俺が考えた成果が出た。みんなでミーティングをやって、こういうメニューで練習した成果が出たんだ。これはものすごい自己肯定感を高めていきます。

では逆に、大失敗しちゃったというときはどうなるかということ、「失敗してしまった。だけれども、自分たちで決めたんだから、しょうがない」というので、自己責任、自分でそのつらさを背負おうとします。そして原因がどこにあったのか。顧問の先生に聞いたり担任に聞いたり、卒業生、先輩に聞きにいったり、何が足りなかったのか。ここのところはどうすれば力がつくのか、必死になるんですよ。そして力をつけていくんです。

だから、子どもたちに任せると、えっと思うような、私たち教師が予測している以上の成果を出してくるんです。これはスポーツの世界で言えば、県大会に出られればいいなど思っていたら、「えっ、うそ、優勝しちゃった」、こんな感じになるわけです。本当に面白いんです。

それから指導者と指導される生徒との関係では面白いことがあったのですが、僕は中学、高校の教師をやっていましたよね。中学校の生徒会の顧問をやっていたとき、それから教務主任というポジションにいたときに、いわゆる部活学校でもないのに、その年は2人の子が全国大会に出場することになったんです。

これはすごく名誉なことだと僕も浮かれてしまって、生徒会長を昼休みに呼んで、「今度2人全国大会に出ることになったから、月曜日の生徒集会のあとにでも、生徒会主催で壮行会をやってくれないか」と言ったんです。全国大会に出るよと思ったら、普通、「頑張ってきて」と壮行会をやるじゃないですか。

そうしたら生徒会長がげげんそうな顔をして、勇気を出したようにして、「それはいくら尾木先生の申し出でもお引き受けすることはできません」と断ったんです。「どうして」と聞いたら、「だって先生はいつも言っているじゃないですか。部活動というのは勝利至上主義ではない。勝てばいいということではない。ずっと先生たち、言い続けていますよ。それなのに何で全国大会に出るとなったら、そんなに喜んで」と。1回戦で負けたチームだって、ものすごくドラマはあるし、努力はあるし、それを切り捨てて、全国大会だけを壮行会でたたえようというのは精神に反するでしょうと、批判されたわけです。

それで僕はなるほどと思って、教頭のところに行って、こうやって頼んだんだけど、断られちゃったと言ったら、「尾木さん、生徒会もしっかりしてるね。だけど、なんかもったいないよな」みたいなことになったのね。

そうしたら生徒会長が放課後に書記、副会長を連れて3人でそろって来て、われわれも執行部の役員会を開いて検討した結果、こういうかたちなら受けてもいいなということになったと言うんです。すべてのサークル、部活を一つひとつ全部たたえさせてください。その中で何々部が全国大会にも出ますというので、そこでみんなで大いに褒めたたえる。1回戦で負けたところも含めて、全部こういう点が優れていた、こういう点で頑張ったというのを評価させてくれ。それだったらいいですよと言うんです。

それで僕は教頭と一緒に、「うん、それでいい、それでいい。やって、やって」といってやってもらったの。僕はそのときに、完全に生徒に乗り越えられたなと思いました。

面白いのは、そのときに全国大会に出たのは陸上部の子なんですけれども、その子の顧問は僕の同僚の国語科の先生で、指導力はまったくゼロなんです。東大の文学部を出られていて、頭はいいし教え方もうまいのですが、

こと陸上に関していえば、まったくダメな先生で、だいたい走れないんです。

では、その先生がどういう指導をしたのか、僕は取材させてもらったんです。そうしたら、私は指導力がない。何も分からないから、「先生は分からないよ。管理顧問だけど、いつも一緒にそばについているよ」というので、例えば区の大会のときなんかは、××中学校の顧問の先生は優れている。あそこはいつも優勝したりしているから、あの先生の指導を見ていなさい。あそこの先生の指導を盗んでこいと。

それでじっと見て、スタートの仕方とか走り方とか盗み見して、それを本番でやってみるの。そうすると自己ベストを更新して1位になるんですよ。今度は東京都大会に出るでしょう。都大会には、また優れたコーチがいるんですよ。その先生のところ盗み見に行かせるんです。なるほどと、またまねしてやる。自己ベストの更新、更新で、関東大会でも更新して、そして全国大会で8位かなんかになっちゃったんです。そういうこともある。

そして同じ年に剣道部が区大会で優勝したんです。ところが、剣道の練習をしていた体育館は古くなって改築になって、取り壊して、なかったんです。だから、練習はグラウンドでやっていたんです。それで優勝した。ちゃんと建物の中でやれていたときには優勝していないんですよ。

どうしてか。僕は当時から取材が好きだったので顧問の先生に聞いたら、自分たちは練習ができない。強くなれないかも分からないけれども、この不利の条件を生かして、精いっぱいやってみようと、いろいろな練習のパターンを考えたりした。いちばん弱い子は、チーム戦で勝っていかないと最後まで回ってこないですよ。その子も試合に出させるために、絶対俺らは負けないで頑張ろうというので結局、最後までつないで、そして勝てたんだと。

それを聞いて、なるほど、不利な条件を逆転の発想で子どもたちが生かして練習すれば、グラウンドでやっても優勝することがあるんだと分かりました。だから、自主的にやっていくこと、自己決定権に依拠していくことが、どんなに大事かということをしごく学びました。確立した個が協働したときのパワーというのは、私たち大人は誰も予測することができません。そのくらいの力を発揮していくということ。

僕は教師体験の中で、今も大学で教授をやりながらですけれども、ゼミの学生なんか指導したり、いろいろなところで学びの連続です。教師がやっていけるのは、学生から教えてもらえる、生徒から学べる。教えるだけではなくて、きょうのテーマですが、教えてもらえる喜びがあるから、67歳になってもやっていけるんです。

このあと谷崎先生との対談になるので、その中で言い足りなかった部分を織り交ぜていこうと思います。どうもありがとうございます。(拍手)

法政大学教職課程センター 多摩シンポジウム
「教える」教師から「教わる」教師へ

HOSEI

(本学ラグビー部監督)

谷崎重幸

×

尾木直樹 (教職課程センター長)

今年も多摩キャンに '尾木ママ' を迎えてシンポジウムを開催します。
今回は、法政大学 (社会学部)OB の高校教諭として長年、東福岡高校ラグビー部も率い、三回の全国制覇も果たし、今春から本学ラグビー部監督に着任された谷崎重幸さんがゲストです。お二人に共通するのは、自主性・個性を引き出す教育。勝利・成績至上主義や、管理的・体罰的指導を超える教育の可能性を考えます。

11 / 26 TUESDAY
17:30 ~ 20:00
(17:00 開場)

法政大学 多摩キャンパス7号館
大教室 B 棟 B301 教室

参加費無料

●お申込み方法

[一般/卒業生の方]・事前申込み不要
[法政大学学部生/大学院生の方]
各キャンパス下記窓口にてお申込み下さい。
多摩キャンパス 教職課程センター多摩相談室 (総合棟2階)
市ヶ谷キャンパス 教職課程センター (富士見坂校舎3階)
小金井キャンパス 教職課程センター小金井相談室 (西館1階)

●交通アクセス

【京王線】新宿駅から準特急で40分 (急行で50分)、
めじろ台駅下車、バスで約10分
【JR線】中央線：新宿駅から快速で54分 (特別快速で42分)、
西八王子駅下車、バスで約22分
【JR線】横浜線：新横浜駅から38分、相原駅下車、バスで約13分
*上記各バスで「法政大学」下車
*校内に駐車スペースはございますが、会場まで徒歩約5分かかります。(市ヶ谷)〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

主催：法政大学教職課程センター
(多摩相談室)

後援：法政大学多摩地域交流センター

お問い合わせ：TEL 042-783-2087

受付：月～金 10:00～18:00

(多摩) 〒194-0298 東京都町田市相原町 4342

た
ま
ま
が
た
ら
う
2013